

## 川原敏子氏 タオル縫製（耳巻き・ヘム縫い）技術者

タオルの仕上工程である縫製は、おもに耳巻きとヘム縫いがあり、タオルの生地がほつれないようにミシンで縫う作業のことを言う。今回の「タオルびと」は、この縫製作業におよそ60年近く携わる川原敏子氏である。ミシン一台で、川原氏が仕上げたタオルの数は星の数ほどある。若い頃はフェイスタオルを一日400枚から500枚は仕上げていたというから驚きである。今は随分スピードが落ちたというが、縫製技術は衰えていない。確かな技術と強い責任感によって取引先との信頼は厚く、なおも現役で活躍中である。「ありがとう」の言葉を大切にし、いつも感謝の気持ちで仕事に向き合う。



川原敏子氏



---

かわはら・としこ ☆ 1935年12月15日、越智郡波方村（現・今治市波方町）生まれ。波方小学校、北郷中学校を卒業し、1950年4月に今井タオル工場（現・今井タオル株式会社）に入社。同社にて、タオルの製織工程に係わる一連の技術を修得。その後、結婚を機に退社。結婚後は家事や子育て、農作業などに多忙な毎日を送っていたが、ある出会いをきっかけに家内労働としてタオルの縫製を始めた。以来、60年以上にわたりミシンを動かしつつ、いまま現役の縫製技術者として活躍中。

## 1. 幼少期

### 白黒の、たった一枚の家族写真

川原敏子氏は、1935年12月15日に越智郡波方村（現・今治市波方町）に、同村出身の岸本喜代一氏と周桑郡丹原町（現・西条市丹原町）出身の花子氏の間に3人姉弟の次女として誕生した。姉の智恵美氏は1934年1月生まれで1歳違いの年子、弟の茂樹氏は1937年12月生まれでちょうど2歳違いである。

喜代一氏は波方村で農業を営みながら家計を支え、岸本家は貧しいながらも平穏な生活を送っていた。しかし、一家の穏やかな生活は戦争によって打ち砕かれる。川原氏が数えて3歳のときのことである。喜代一氏に召集令状、通称「赤紙」が届き、遠く中国の戦地に赴き、27歳で戦争の犠牲となったのである。弟は母親のお腹のなかにいて、父親は長男の誕生を見ずしてこの世を去った。ただ、生まれてくる男の子には「茂樹」と名付けるようにと、長男誕生の喜びを母親に託していた。

父親が母親に宛てた戦地からの一通の手紙がある。「手紙」は、母親が喜代一氏のたったひとつの遺品として大事に保管していたもので、その母親が亡くなったときに川原氏が受け継ぎ、いまもときどき読み返しては父親を偲んでいる。弟の名前についてのエピソードは、この「手紙」から経緯を知ることができた。「今度の子が男で有ったら（茂樹）と付けるのよね」という一文が記されている。また、「智恵美や敏子は元気かね 何時も思うよ 近頃夢を見るよ」とも綴られている。

母親は、戦死した父親について多くを語らなかったが、中国の上海市にある羅店鎮  近くにある孟家宅  で最期を迎えたときだけ話しをしていた。父親との思い出がほとんどない川原氏は、父親が命を絶った場所として母親から聞かされていた片言の中国の地名「ラテンチン、モウカタク」が、脳裏に焼き付いて離れない。父親

の最期を知る、唯一の手がかりである。

喜代一氏は、1937年7月に勃発した日中戦争の犠牲者となった。日中戦争は、日本が1904年の日露戦争の勝利によって占領下においた中国東北部の満州とその南部地域をおもな舞台として繰り広げられた日本と中国の戦争である。1931年9月の柳条湖事件  をきっかけに日本は満州への侵略を開始し、1937年7月の盧溝橋事件  によって日本と中国は全面戦争に入った。

喜代一氏の「手紙」によると、喜代一氏は1937年8月26日の夜に今治を出港し、翌27日に山口県下関市の南端にある彦島を通り、30日に上海に上陸した。戦死した正確な日付はわからないが、「手紙」の日付が9月9日になっているため、召集されて1ヶ月も経たないうちに上海市内の「孟家宅の血戦」にて命を落としたとおもわれる。その後、日中戦争は、日本の第二次世界大戦の敗北を受けて1945年8月に終結した。



右の一枚の写真は、川原氏が財布のなかに入れて肌身離さず身に付けている「お守り」である。父親の喜代一氏、母親の花子氏、姉の智恵美氏、そして川原氏（前列左）と一緒に納まった白黒の家族写真である。父親の顔を知る唯一のものであり、「お父さん」と呼んだ記憶は川原氏にはないが大切な形見でもある。「大切な」という単純な言葉の容れ物には収まりきれないほど、「大切な」ものである。写真に写った幼い川原氏のこれからの人生において、辛いこと、苦しいこと、悲しいことに出会うたび、川原氏はこの写真に勇気付けられることになる。

## 父親代わりの祖父から、たくさんのことを教わった

川原氏は、第二次世界大戦が始まった1941年に波方国民学校に入学した。時代に翻弄されながらも逞しく生き抜き、1946年に波方国民学校から改称された波方小学校（現・今治市立波方小学校）を1947年3月に無事卒業した。そして、同年4月に波止浜町・波方村共立北郷中学校（現・今治市立北郷中学校）に入学した。

川原氏は、喜代一氏の両親とも同居していたので、生まれてきた弟を含めて家族6人で、戦中と戦後の動乱期を過ごした。一家の大黒柱を失った岸本家では、祖父の永五郎氏が父親代わりとなった。川原氏は中子<sup>ちゅうし</sup>でしかも女子だったので、時代的に「どうでもええ」順番に生まれたが、父親に代わって育ててもらった祖父には可愛がられた。

それもそのはずである。姉や弟は、何度もおなじことを言う祖父の話に空返事だったが、3人の子供たちのなかでとびきり素直だった川原氏は、何度もくり返される祖父の話に熱心に耳を傾けた。いつも祖父のそばにいて相づちを打ちながら、多くのことを教わった。印象的な言葉がある。

## 「朝のゆらくら、晩のしらくら」

あまり聞き慣れない言葉であるが、反面教師的な意味合いを持つ。つまり、朝からのりくらしして過ごし、夜は遅くまでだらだら起きている、「朝のゆらくら、晩のしらくら」のような人間にはなるな、という意味である。朝は早くに起きて今日の用事をさっさと済ませ、夜は早く寝て明日に備える。祖父の教えのとおり、川原氏は幼少の頃から川原家に嫁いだあとも、そしていまも、朝早く起きて午前中にはだいたいの用事を済ます。

祖父母、母、姉、弟と家族6人で力を合わせて生きてきたが、父親がいないことで人から「後家」と呼ばれていじめられたことも多々

あった。「後家の子、後家の子って言われてね。そんな言葉をよう使われたんは身に沁みとるから覚えとります。今の人では考えられんの。そらもう哀れなかったよ」と昔を振り返って、いまだからこそ本音を吐露してくれた。当時は母親に心配かけまいと、子どもながらに必死でいじめにも負けないように、精一杯弱音を吐かなかったからである。

岸本家は代々農業を営んでいたもので、川原氏は結婚して岸本家を出ていくまで一所懸命に祖父母の手伝いをした。姉は20歳で結婚し、弟は学を身に付けるために勉学に励んでいたため、家族で一番の働き手は川原氏であった。実際に、幼少時代に限らず就職してからも、一人前以上に農業作業にとり組んだ。

農家に機械が導入される以前は、田植えも稲刈りもすべて手作業だった。毎年6月から7月にかけておこなわれる田植えは、<sup>せいじょう</sup>正条植えと呼ばれる方法でおこなわれた。田植え定規と田植え綱（ヒモ）を使って、株と株の間隔を一定にして植える、明治期以降の伝統的な田植えの方法である。正条植えは、空気が通りやすく雑草や害虫をとり除きやすいというメリットがあった。昔の人の智慧である。腰を曲げたままの姿勢を長時間維持する重労働であり、朝の6時頃に始まり午後3時頃までつづいた。しかしこれで一日の農作業は終わらない。田植え仕事を終えて帰ると、明日の田植え準備にとりかかる。苗代から苗をとる苗取りの作業が待っており、夜の9時頃までかかるのが通常だった。

稲刈りは専用の鎌を使っての手作業であり、これも気が遠くなる作業であった。幼いときは鎌をうまく扱えないので、代わりに収穫後の藁をきれいに整える作業の手伝いをした。15株を1束にし、稲を刈ったあとの田んぼに稲木干しする。米の収穫もたいへんな手作業であるが、収穫後の藁は相当の分量になったため、これを手作業で整理するのもたいへんだった。

農業は自然相手の仕事であり、土日祭日も関係なく働いた。こうした長年の経験と習慣によって、川原氏は農作業のノウハウを一通

り身に付け、結婚後にも引き継がれていく。小さい頃、祖父の話に  
頷いていた川原氏は、「朝のゆらくら、晩のしらくら」の言葉をいま  
も胸に秘めながら朝早く起きて元気に家事、農業、縫製をこなして  
いる。（次号につづく）

